The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カナダ先住民の傷をめぐる政治と文学 : Joseph Boyden、寄宿学校制度、カナダ真実和解委員会、2015年総選挙
Author(s)	霜鳥, 慶邦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

注記：冊子体の図版は白黒印刷で収録されている。

カナダ先住民の傷をめぐる政治と文学

——Joseph Boyden、寄宿学校制度、カナダ真実和解委員会、2015 年総選挙——[1]

霜 鳥　慶 邦

‘Because it’s 2015!’ —Justin Trudeau

１．Joseph Boyden, *Three Day Road* とカナダ先住民の記憶

現代のカナダ文学を代表する作家の 1 人に、Joseph Boyden (1966-)がいる。アイルランドとスコットランドと北米先住民の血を引くこのハイブリッドな作家は、現在、北部オンタリオとニュー・オーリンズを拠点に、大学の創作課程で教鞭をとりながら創作活動をしている。Boyden が作家として高い評価を受けるきっかけになったのが、第一次世界大戦でカナダ軍に加わり西部戦線に出征するクリー族の少年 2 人の悲劇を描いた第一作目の長編小説 *Three Day Road* (2005)だ。

この小説の最大のねらいであると同時に最大の評価理由とされるのが、カナダにおける従来の大戦文学と歴史認識においてほとんど注目されることのなかった先住民に光を当て、カナダの大戦の記憶の批判的再構築に貢献した点にある。伝統的にカナダ文学における第一次大戦の記憶は、白人の体験を中心に構築されてきた。たとえばカナダの大戦文学の代表的存在として位置づけられている Timothy Findley (1930-2002)の *Wars* (1977)は、戦争の狂気に飲み込まれる主人公の物語を描くことで、公式化・神話化された大戦の記憶への対抗的な小さな物語を提示するが、この物語に先住民の姿を確認することは難しい。

大戦の集合的記憶における先住民の周縁性は、カナダの首都オタワの記念碑にも確認することができる。写真 1 は国会議事堂のすぐ近くに建つ戦争記念碑だ。第一次大戦の戦没者を記念するために 1939 年に建立されたこの記念碑は、その後、第二次大戦、朝鮮戦争、第二次ボーア戦争、アフガニスタン戦争、さらには過去と未来のすべての戦没者を記念する役割を与えられ、今日に至っている。記念碑には、第一次大戦で戦ったカナダ軍兵士を表す 23 体のブロンズ像が設置されているが、この中に先住民の姿を見つけることはできない（写真 2)。また、記念碑の前にある無名戦士の墓の前に立つとき、どれほどの人がそこに先住民の姿を重ね合わせるだろうか（写真 3)。

[1] 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C)）「第一次世界大戦 100 周年のために—現代イギリスにおける大戦の記憶の総合的研究」（課題研究番号：15K02300、2015-2017 年度）の助成を受けている。

写真 1：カナダ戦争記念碑（オタワ、2015 年 9 月 15 日、筆者撮影）

写真 2：カナダ戦争記念碑の兵士像（オタワ、2015 年 9 月 15 日、筆者撮影）

写真 3：無名戦士の墓（オタワ、2015 年 9 月 15 日、筆者撮影）

2001 年になってようやく、上記の戦争記念碑から徒歩 2 分ほどのコンフェデレーション・パークに、先住民の戦争協力を称える記念碑が建てられた（写真 4）。カナダの首都の記念碑のレベルにおいて先住民が本格的に可視化されたのは、21 世紀になってようやくのことだった。また、記念碑が国家の集合的記憶を形成・強化・継承するための「記憶の場」であることを考えれば、これらの記念碑は、カナダの戦争に関する集合的記憶に先住民が本格的に登場するまでにいかに長い時間を要したかを物語っている。

写真 4：カナダ先住民戦士記念碑（オタワ、2015 年 9 月 16 日、筆者撮影）

写真 4 の記念碑がカナダ先住民の戦争協力の可視化を意味するとすれば、*Three Day Road* はそれに物語を与え、さらにそれを白人中心の大戦の記憶物語と織り合わせ、カナダの歴史を再物語化することに貢献したと言えるだろう。複数の賞を受賞し高い評価を得ているこの小説は、今では上記の Timothy Findley の *Wars* と並んでカナダを代表する大戦文学として位置づけられている。

さて、ここまで大戦文学としての *Three Day Road* の意義について紹介してきたが、このテーマについては、別稿にて詳しく論じる予定のため、本稿ではこれ以上深く論じることは控えておきたい。本稿は、本作品に描かれたもう 1 つの重要なテーマに注目する。それは、寄宿学校制度である（写真 5）。カナダの寄宿学校制度の歴史について簡単にまとめておこう。カナダでは、19 世紀半ば以降、政府による同化政策の一環として、約 15 万人の先住民の子どもたちが家族から強制的に引き離され、教会が運営する寄宿学校に入学させられた。そこでは先住民の伝統的な言語・文化・宗教は劣等なものとして全否定され、白人の言語と文化と宗教が強要された。また、身体的・精神的虐待、さらには性的虐待も横行した。その過酷な環境に耐えられず、自殺も含めて多くの子どもが在学中に死亡した。学

校を出たとしても、その後遺症に苦しみ続ける者が多く、アルコール依存、薬物依存、犯罪、高い自殺率といった問題は、今でも先住民のコミュニティが抱える深刻な問題となっている。カナダで最後の寄宿学校が閉鎖されたのは、1996 年になってようやくのことだった[2]。寄宿学校制度が先住民に残した傷の癒やしと和解を求めて、先住民たちの運動は今も続いている。

写真 5：‘A group of nuns with Aboriginal students’, ca.1890, Quebec, photograph by H. J. Woodside, Library and Archives Canada, accession number 1970-157 NPC, item number p.62, reproduction copy number PA-123707.

第一次大戦の時代を舞台とする *Three Day Road* の作品世界は、多くの寄宿学校が存在していた時代であり、作品の登場人物たちも、寄宿学校に入れられ、そこで日常的な虐待を受ける。この作品における寄宿学校の表象に関する詳細な分析については、上で言及した別稿において行う予定のため、本稿では直接取り上げることは控えておきたい。本稿は、*Three Day Road* の発表以後も、寄宿学校が先住民に残した傷の癒やしの活動に取り組む Boyden の文学的・社会的活動に注目しながら、この問題の今日的状況と課題の一端について考察することを目的とする[3]。

---

[2] 寄宿学校制度自体は 1996 年に終わったとしても、それが象徴する制度的差別と暴力は、形を変えて今でも確実に存在している。たとえばある記事は、先住民が不当に逮捕・投獄され、非人間的扱いを受けている事実を伝え、それを「新たな形の寄宿学校」（Macdonald）または「大人の寄宿学校」（Finlay）と呼ぶ。

[3] *Three Day Road* 以外にも、カナダの寄宿学校をテーマにした小説、映画、芸術作品は数多く存在する。すべてをここで挙げることはできないが、代表的な作品については、Wikipedia の ‘Canadian Indian residential school system’の項目で確認できる。

その際に、2015 年のカナダは、2 つの点で特に注目に値する。まず、2008 年に設立されたカナダ真実和解委員会が、約 6 年の歳月をかけて約 6740 人の寄宿学校の元生徒（「サヴァイヴァー」と呼ばれる）とその家族にインタヴュー調査を行い、この年の 6 月 2 日に最終報告書概要を、さらに同年 12 月 15 日に最終報告書を発表し、政府に対して癒やしと和解と改善を訴えた。また、この年の 10 月の総選挙で、自由党の Justin Trudeau が、4 選をねらう保守党の Stephen Harper 首相を地滑り的勝利で破り、約 10 年ぶりの政権交代を実現した。後で論じるように、この総選挙は先住民の問題と深く関係している。これらの出来事に焦点をしぼりながら、議論を進めていく。

２．カナダ史の「悲しい 1 章」、「文化的ジェノサイド」、「文化の爆弾」

カナダ真実和解委員会は、2008 年に、当時の首相 Stephen Harper が寄宿学校制度の先住民に対する暴力の過ちを正式に認め謝罪したことを契機に発足した。政府から正式な謝罪を得たことは、先住民の運動の歴史の中でもきわめて重要な出来事だった[4]。やや長くなるが、Harper による謝罪の冒頭部分を引用する。ここには、カナダ同化政策の差別性と暴力性が簡潔に物語られている。

> The treatment of children in Indian Residential Schools is a sad chapter in our history.
>
> For more than a century, Indian Residential Schools separated over 150,000 Aboriginal children from their families and communities. In the 1870's, the federal government, partly in order to meet its obligation to educate Aboriginal children, began to play a role in the development and administration of these schools. Two primary objectives of the Residential Schools system were to remove and isolate children from the influence of their homes, families, traditions and cultures, and to assimilate them into the dominant culture. These objectives were based on the assumption Aboriginal cultures and spiritual beliefs were inferior and unequal. Indeed, some sought, as it was infamously said, 'to kill the Indian in the child'. Today, we recognize that this policy of assimilation was wrong, has caused great harm, and has no place in our country. (Harper)

Harper は、寄宿学校制度をカナダ史の「悲しい 1 章」と呼び、それを自国の歴史物語の一構成要素として組み込むことの重要性について述べる。引用文中の'to kill the Indian in the child'という表現は、比喩的な意味で用いられているが、実際に自殺者も含め多くの死者がいたことが知られている。

その残酷な実態を理解するために、2015 年 6 月 2 日に発表されたカナダ真実和解委員会の最終報告書概要を見てみよう。500 ページを超える膨大な量のこの概要は、ウェブ上で無料で公開されている。これに目を通すと、じつに多くの身体的・精神的・性的虐待についての証言に出くわす。以下はその一部である。

[4] Harper による謝罪までの過程の詳細については、広瀬を参照。

> I couldn't talk a word of English. I talked Cree and I was abused for that, hit, and made to try to talk English. (The Truth and Reconciliation Commission 82)

> I lost my language. They threatened us with a strapping if we spoke it, and within a year I lost all of it. They said they thought we were talking about them. (The Truth and Reconciliation Commission 82)

> [W]e had to eat all our food even though we didn't like it. There was a lot of times there I seen other students that threw up and they were forced to eat their own, their own vomit. (The Truth and Reconciliation Commission 89)

> I lost my braids, my beautiful hair was cut, and I felt like my identity was so confused, I didn't know who I was. What is even worse is that they started to sexually take advantage of me and abuse me, not one, not two, but many, many people for a very long time, until I was sixteen. I started to really deteriorate. I became very sick and anorexic, and really started to go downhill. (The Truth and Reconciliation Commission 159)

母語を否定され、アイデンティティを否定され、身体的に痛めつけられ、性的に虐待される子どもたち――その暴力性と残忍性を表すために、真実和解委員会は、寄宿学校制度を「文化的ジェノサイド」と呼ぶ。それは、個人の身体・精神・アイデンティティを破壊するだけでなく、先住民の文化・伝統・コミュニティ全体を殲滅することを目的とする行為であった。

Boyden は、あるインタヴューで、寄宿学校の暴力についてこう述べる――'Unfortunately there was a real break for many generations due directly to the residential school system, which makes a lot of people not sure of their own history any more and which is really sad' (Wyile)、さらに――'I think one of the most damaging things the residential school did to so many young people was completely break their confidence' (Wyile). このような学校教育による制度的・内面的破壊と疎外の悲劇性については、ケニアの作家 Ngũgĩ wa Thiong'o が *Decolonising the Mind: The Politics of Language in African Literature* (1986)で詳述する内容が大いに参考になる。ここに描かれた、植民地主義とさらに新植民地主義に支配されたケニアの状況は、かなりの程度の普遍性を有していると思われる[5]。Ngũgĩ は、帝国主義の最大の武器としての「文化の爆弾」についてこう説明する――「文化の爆弾たるや、一民族に自分たちの名前、自分たちの言語、自分たちの環境、自分たちの戦いの遺産、自分たちの団結、自分たちの能力、最終的

[5] ちなみにカナダ真実和解委員会最終報告書概要の参考文献には、Ngũgĩ の回想録 *Dreams in a Time of War: A Childhood Memoir* (2010)が含まれている。

には自分自身への信頼をなきものにすることである」（グギ 44）。

上に引用した公式謝罪は、先住民たちの活動における大きな成果と言えるが、残念なことに、謝罪を表明したはずの Harper は、その後、先住民側からの再三の要請にもかかわらず、先住民の問題に真剣に取り組むことはなく、そのまま 2015 年の総選挙での敗戦によって首相の座を降りた。「悲しい 1 章」に真摯に向き合い、その傷を癒やし、真実を究明し和解へと前進しようとする意志は、Harper にはなかったと評価せざるを得ない。

３．2015 年カナダ――「協力と友愛の道のり」

2015 年 10 月のカナダ総選挙は、カナダ国内のみならず世界の注目を集めた。Boyden も自身の政治的主張を積極的に発信した。Boyden は、Harper 首相による 2008 年の公式謝罪を「具体的行動の伴わないリップ・サービス」と呼び、先住民と真摯に向き合わない Harper を痛烈に非難した（Ostroff）。そして先住民が抱える様々な問題を具体的に挙げ――教育、貧困、先住民女性の行方不明・殺人問題 [6]、自殺率の高さ、寄宿学校制度の傷跡など――、これらは「ファースト・ネーションの問題」ではなく「カナダの問題」であることを強調する。さらに、2015 年の時点でもカナダは「人種差別的国家」であると思うかという質問に対して、Boyden は「間違いなくそうだ」と断言する（Ostroff）。

別のインタヴューでは、Boyden は自分の家族に話題を引き付けながら、Harper 政権の差別的政策を強く非難する――‘My father would be appalled by the Harper government’s deeply unethical election tactics: their bullying, their fear mongering and intolerance, their race-baiting, their absolute willingness to infect us with the basest of what is, at its heart, hatred’ (Boyden, ‘Author’). そして Trudeau に未来のカナダの希望を見出す――‘Our country, I know, is what *I am*. Our country is what Justin Trudeau is. We are a great big and beautiful and loud and proud family who always stand up for one another and always protect one another; we not just refuse but are fierce with those who wish to try and do the ugly work of tearing us apart’ (Boyden, ‘Author’).

総選挙は、Boyden の期待通り Trudeau の圧勝に終わり、11 月 4 日、Trudeau 新内閣が発表された。Trudeau 自身を除く閣僚 30 人の男女比が 50:50 という斬新なメンバー構成は大きな話題を呼んだ。ジェンダー・バランスへの配慮の理由として Trudeau が発言した‘Because it’s 2015!’という「クールな」言葉もまた、多くの人びとから賞賛された [7]。ジェンダーのみな

[6] カナダでは、先住民女性の殺害や行方不明が深刻な問題となっている。過去 30 年間の被害者数は 1200 人と言われているが、最近、それをはるかに上回る 4000 という数字が出ている。先住民は Harper 前首相にこの問題の調査を要請したが、Harper はそれを拒否し続けた。新首相 Trudeau は、この問題の本格的な調査を約束している。Boyden はこの問題を「国内テロリズム」、「国家の犯罪」、「我が国のもっともひどい汚点の 1 つ」と呼ぶ（Ostroff）。この問題の重要性を社会に訴えるために、2014 年に、Boyden は、Margaret Atwood, Michael Ondaatje, Thomas King, Gord Downie, Lee Maracle をはじめとする 50 人以上の作家や芸術家らとともに、作品集 *Kwe: Standing with Our Sisters* を発表した。収益は Amnesty International の No More Stolen Sisters の活動に寄付される。

[7] Trudeau の発言を賞賛する女優 Emma Watson のツイートも話題を呼んだ――‘Why a gender balanced/50:50 government? “Because it’s 2015!” Coolest thing I’ve ever seen in a while. ❤U Canada’ (Watson).

らず、世代間のバランスも考慮され、さらに先住民、移民、LGBT、四肢障害者、視覚障害者などを含めた、じつに多様性に富む内閣が誕生した。

ウェブ上で公開されている各閣僚への委任状で注目すべき点は、「真の変革」を実現するために様々なレベルでの協力関係を重視するなか、特に先住民との関係を最重要視している点だ――'No relationship is more important to me and to Canada than the one with Indigenous Peoples. It is time for a renewed, nation-to-nation relationship with Indigenous Peoples, based on recognition of rights, respect, co-operation, and partnership' (Trudeau, 'Minister'). この発言を踏まえ、カナダ真実和解委員会代表 Murray Sinclair は、Trudeau を'the first Canadian Prime Minister to commit a nation-to-nation relationship with indigenous people'と、希望をこめて評価した（Adam）。

その真実和解委員会は、2015 年 12 月 15 日、約 4000 ページという圧倒的な分量の寄宿学校調査の最終報告書を発表し、政府に提出した。報告書を受け取った Trudeau は声明を発表した。Trudeau は、寄宿学校制度を「カナダ史の最も暗い章の 1 つ」と呼び、その痛みが現在でも先住民を苦しめている状況を認め、先住民に対して深く謝罪した。そして今こそ「カナダと先住民との関係の全面的な刷新」が必要な時だと宣言した。さらに最終報告書を、「先住民の人びととの協力と友愛の道のり」における「画期的出来事」と呼び、「癒やしと和解へ向けての記念碑的偉業」に貢献した人びと（寄宿学校のサヴァイヴァー、その家族と共同体）に感謝の意を表明した（Trudeau, 'Statement'）。

「先住民の人びととの協力と友愛の道のり」の今後については、時間をかけて見つめていく必要がある。ただその道のりが決して平坦なものではないことは確かだ。未解決の多くの問題に加えて、新たな課題も現れている。具体例を 1 つ挙げるとすれば、シリア難民の受け入れとカナダ先住民との関係がある。カナダ政府は 2016 年 2 月末までに 25000 人の難民を受け入れることを表明した。空港で難民を歓迎する Trudeau 首相の姿は広く報道され、カナダの寛容さと共感の精神を印象づけた。カナダ総督 David Johnston は、難民問題への対応を「カナダにとっての決定的瞬間」あるいは「それ以上」と呼び、「人類の中でもっとも周縁的で弱い人びとをどう支援すべきか、あらためて想像すべき機会である」と述べた（Hall）。ある報道記事はこの発言を引用し、次のように問題を投げかける――カナダは国際問題に対しては迅速な対応を見せるが、では「カナダ内部のもっとも周縁的で弱い人びとを抱えるファースト・ネーションのコミュニティをどう支援すべきか、あらためて想像する意志はあるのか？」（Hall）。「外的他者」である難民への寛容さは、「内的他者」である先住民への差別と不寛容の歴史をあらためて想起させる契機となる。ファースト・ネーションの人びとの間でも、難民受け入れに対する意見は分かれている（Brohman）。先住民をめぐる問題は、カナダ国家の枠を超えたグローバルなレベルで熟慮すべき問題へと拡大し、複雑化している。こうした状況を踏まえると、現時点では、「Trudeau とその政府が実際に何かを達成するまでは賛辞を送るのは控えておこう」（Wheeler）という、カナダ先住民の血を引く作家 Jordan Wheeler の慎重な立場を尊重すべきと思われる。

４．未来の世代のために――教育のための芸術

最後に Boyden の創作活動に注目して本稿を締めくくることにしたい。*Three Day Road* 以後も着実に作品を発表し続けているなか、寄宿学校をテーマにしたものが、2014 年の新作 *Going Home Star: Truth and Reconciliation* だ。これは、カナダのロイヤル・ウィニペグ・バレエ団のために作られたバレエ作品である（本稿執筆時の 2016 年 4 月時点でも公演中）。カナダ真実和解委員会の支援を得て製作されたこの作品は、ファースト・ネーションの寄宿学校での体験を主題とする。

Boyden は当初、「先住民の物語」を「西洋的芸術形式」で創作することに違和感を抱いていた。だが次第に、「新境地を拓く方法」で「先住民の生きた歴史」を描くことに興味を持ったと述べる（Abma）。カナダ先住民と西洋を結ぶこの芸術形式は、作品の主題に直結する。それはつまり、真実和解委員会代表 Sinclair が述べるように、この作品が決して「先住民の物語ではない」こと、具体的には、この作品が描くのは、「寄宿学校の生徒の体験」だけでなく、「カナダの体験」でもあるということだ（‘Residential school ballet’）。Boyden はまた、この作品を「古い歴史的な」内容にはしたくなかったと言う。この作品は現代の時点から物語が始まる。このプロット構成の理由について Boyden は、寄宿学校の後遺症がいまだに何世代にもわたって続いていることを指摘し、この作品を通して、「若い人たちに語りかけたかった」と述べる（‘Joseph Boyden wades into “very sacred” territory’）。このような制作者側の意図は、かなりの程度成功したと言ってよい。批評家 Robert Enright は、作品の主題、演出、すべてを高く評価し、こうしめくくる――‘The history of the residential schools is now our history as well as the history of First Nation’s people. Memory has been made flesh in a new kind of kinetic genesis; it promises a legacy of light, understanding and hope’ (Enright).　寄宿学校の歴史が「我々」の歴史であるという認識をうながし、そしてその記憶を現代に新鮮によみがえらせようとする作品のねらいを、的確にとらえている。

上に引用した Boyden の発言で、若者の存在を重視しているように、Boyden が精力的に創作活動を続ける大きな理由の 1 つが、若い世代への教育だ。「ファースト・ネーションの若者が直面している最大の問題は教育である」と述べる Boyden は、高校を卒業するファースト・ネーションの若者が全体の半分にも満たない現実に言及し、「システム」そのものが「明らかに崩壊している」と指摘する（Ostroff）。このシステム崩壊の根本原因の 1 つこそが寄宿学校制度だ。Boyden は、先住民の子どもたちが 7 世代にもわたって強制的に家族から引き離され、「冷たく、しばしばひどい虐待が行われた施設」に入れられた事実を踏まえ、先住民が受けた傷を癒やすには、同様に 7 世代分の時間を要するだろうと述べる（Ostroff）。

7 世代――じつに長い道のりだ。だが本稿で紹介した 2015 年の一連の出来事は、カナダがこの長い道のりを歩んでいくための希望と手がかりを確実に与えてくれたはずだ。今後、Trudeau 政権のカナダが癒やしと和解の問題にどのように取り組んでいくのか、そして Boyden をはじめとする作家たちがこの問題を文学的テーマとしてどう扱い次世代へ伝えて

いくのか、引き続き注目していきたい。

Works Cited

Abma, Sandra. ‘Going Home Star conveys bitter residential school experience through ballet’. *CBC News*. 28 Jan. 2016. Web. 6 Mar. 2016.

Adam, Betty Ann. ‘Justin Trudeau becomes first Canadian PM to promise equal treatment for aboriginals, says Justice Murray Sinclair’. *Saskatoon StarPhenix*. 23 Nov. 2015. Web. 25 Nov. 2015.

Boyden, Joseph. ‘Author Joseph Boyden on why he supports Justin Trudeau’. *Liberal*. 13 Oct. 2015. Web. 26 Oct. 2015.

---. *Three Day Road*. 2005. London: Phoenix, 2006. Print.

Brohman, Erin. ‘Manitoba First Nations leaders split on Syrian refugees coming into Canada’. *CBC News*. 18 Nov. 2015. Web. 7 Dec. 2015.

Enright, Robert. ‘RWB’s Going Home Star: Truth and Reconciliation is inspired and inspiring’. *CBC News*. 2 Oct. 2014. Web. 21 Mar. 2016.

Findley, Timothy. *Wars*. 1977. London: Faber and Faber, 2001. Print.

Finlay, Carol. ‘For indigenous women, prisons are the adult version of residential schools’. *The Globe and Mail*. 28 Mar. 2016. Web. 29 Mar. 2016.

Hall, Chris. ‘Will Canadians be as generous to First Nations as they are to Syrian refugees?’. *CBC News*. 3 Dec. 2015. Web. 3 Dec. 2015.

Harper, Stephen. ‘Statement of apology to former students of Indian Residential Schools’. *Aboriginal Affairs and Northern Development Canada*. 11 June 2008. Web. 17 May 2015.

広瀬健一郎.「カナダ首相による元インディアン寄宿舎学校生徒への謝罪に関する研究――謝罪への過程とその倫理――」.『国際人間学部紀要』17．鹿児島純心女子大学国際人間学部(2011 年 3 月): 13-44. Print.

‘Joseph Boyden wades into “very sacred” territory with residential school ballet’. *CBC News*. 30 Jan. 2016. Web. 4 Mar. 2016.

Macdonald, Nancy. ‘Canada’s prisons are the “new residential schools”’. *Maclean’s*. 18 Feb. 2016. Web. 9 Mar. 2016.

グギ，ワ・ジオンゴ.『増補新版　精神の非植民地化――アフリカ文学における言語の政治学』．宮本正興・楠瀬佳子訳．第三書館，2010 年．Print.

Ostroff, Joshua. ‘Joseph Boyden on Harper, First Nations, the Election, and Canadian Racism’. *The Huffington Post Canada*. 15 Oct. 2015. Web. 16 Oct. 2015.

‘Residential school ballet, Going Home Star, opens in Winnipeg’. *CBC News*. 1 Oct. 2014. Web. 21 Mar. 2016.

Trudeau, Justin. ‘Minister of Indigenous and Northern Affairs Mandate Letter’. *Prime Minister of*

Canada: Justin Trudeau. 13 Nov. 2015. Web. 9 Mar. 2016.

---. ‘Statement by Prime Minister on Release of the Final Report of the Truth and Reconciliation Commission’. *Prime Minister of Canada: Justin Trudeau*. 15 Dec. 2015. Web. 24 Dec. 2015.

Truth and Reconciliation Commission of Canada. *Honouring the Truth, Reconciling for the Future: Summary of the Final Report of the Truth and Reconciliation Commission of Canada*. 2015. PDF file.

Watson, Emma. ‘Why a gender balanced/50:50 government? ‘Because it’s 2015!’ Coolest thing I’ve ever seen in a while. ❤U Canada.’. 5 Nov. 2015. 11:20 p.m. Tweet.

Wheeler, Jordan. ‘Justin Trudeau doesn’t deserve headdress’. *CBC News*. 8 Mar. 2016. Web. 10 Mar. 2016.

Wyile, Herb. S*peaking in the Past Tense: Canadian Novelists on Writing Historical Fiction*. Ontario: Wilfrid Laurier UP, 2007. Kindle file.